

中間とりまとめ（案）における「育成すべき青年像」から見た
地域課題対応人材育成事業「地域コアリーダープログラム」の現状と方向性

○育成すべき青年像（中間とりまとめ（案）抜粋）

- ・自ら目標を立てることができ、活躍の場を見つけることができる青年。
- ・経験から自分なりの学びを得て、それを今後活かせる青年。
- ・責任感があり、周りの人間と深い信頼関係を持つことができ、困難に対してチームで取り組んでいける青年。
- ・周りに影響を与えることができ、事業成果をより社会に還元していける青年。

中間とりまとめ（案）	現状	方向性
①プログラムの在り方について ・青年に様々な目標を立てることを求め、その達成の過程で <u>自らの能力に気付くことができる場</u> を用意すべきである。 ・青年は事業参加に向けての事前準備をしっかりと行い、<u>問題意識を明確化</u>した上でプログラムに参加することで、より有意義なプログラムになると考えられる。 ・事業の構成は、詰め込み型のプログラムではなく、事前に焦点を絞ったプログラム（テーマを定めることも含め）にすべきである。 ・各プログラムを進める過程では、様々な課題を抱えた人間と協力して、<u>課題（通常では経験しない困難な課題解決も含め）に取り組む経験や体験学習等のアクティブ・ラーニングを含めることも重要</u>と考えられる。 ・各プログラムを通して、<u>自らの能力（弱みも含め）を客観視できることも重要</u>と考えられる。	・事前研修で団別及び個別テーマを決め、帰国後に作文を課すことにより成果が分かる。 ・団別及び個別テーマに基づき自主研修を行うことで目的意識を明確化するとともに、出発前研修での共有で学び合いに生かしている。 ・専門分野に特化したディスカッションや視察で構成している。 ・自主研修で学び合い、派遣先で関係省庁や現場施設との意見交換を行うアクティブ・ラーニングである。 ・異なる経験を持つ同世代の青年どうしの話し合いで自分の位置づけを客観視できている。	

・プログラムの内容面では、価値観や公平性など国境や文化を超えると異なる事項について含めるべきである。そのことを通して、<u>青年が自身について改めて考える機会、自分の国について外からの視点で改めて知る機会が持てるとよい。</u> ・実際に経験が困難な事項（例：訪問困難国での経験、過去の時代経験等）については、その経験をした者から学べるプログラムを用意することで、経験を共有することができるのではないかな。 ②青年の募集選考の在り方について ・画一的な青年を集めるのではなく、参加者の多様化（社会人参加増、芸術系人材の参加等）を目指す必要があるのではないかな。 ・社会人参加者の増加のためには、例えば、研修・訓練機会を模索するも自前で研修を組めない企業へのアプローチが効果的ではないかと考える。 ・企業へのアプローチにあたっては、内閣府事業に青年を派遣した企業の具体的な派遣目的及び派遣青年が企業に持ち帰った成果を聞き取り、青年の派遣を検討する企業に向けて広報すべき。 ・広報では、参加青年が事業を通して得られる未来の成果がイメージできるよう、写真・文章等に工夫を行うべきではないかな。 ③参加青年のフォローアップ調査について ・事業に参加した青年のその後について、一定年ごとにアンケートを取ることで成長をより長いスパンで評価することを行うべきではないかな。	・派遣国と我が国との違いを見ることで、我が国の社会システムの良さ及び課題を客観的に把握することができる。 ・高齢・障害者・青少年の3分野で一緒に研修を行っているので、異なる専門分野の青年との学び合いや人格形成ができています。 ・コア事業は地域課題である3分野の専門的知識・経験のある社会人中心であり、実務者、中間管理職、研究職など幅広い構成である。 ・上述のとおり社会人中心となっている。 ・広報の実施例 高齢：高齢者団体等に対して青年募集のお知らせ 障害者：既参加青年が知り合い・職場の同僚に本事業を紹介。 青少年：青少年団体等に対して青年募集のお知らせ 等 ・全事業で参加青年の生の声をパンフレットや内閣府ウェブサイトに記載している。 ・参加青年は、事業参加後、一定年ごとフォローアップ調査を実施している。	・訪問先の話を聞くだけでなく、日本の現状と課題について青年が説明する機会を設けると良いのではないかな。 写真・文章等の更なる工夫
--	---	--